



日本仏教看護・ビハーラ学会

Japan Association for Buddhist Nursing and Vihara Studie

第 19 回年次大会

2023 年 6 月 10 日 (土) ・ 11 日 (日)

テーマ『いのちのインクルージョン～対話の力を信じて～』

会 場 曹洞宗 隆明山 大栄寺
〒950-0205 新潟市江南区沢海 3 丁目 3-18

プログラム

6 月 10 日 (土)

大会長講演「地域精神医療のロマンとリアル～宮沢賢治に導かれて～」

ささえ愛よろずクリニック院長 今村 達弥

基調講演「 がんばれ仏教 (仮題) 」
東京工業大学副学長 上田 紀行

シンポジウム「社会にアウトリーチする仏教」

シンポジスト；伊藤竜信 (浄土宗西蓮寺 住職)

シンポジスト；堀真哲 (真福寺 住職/テラ・ネット代表)

シンポジスト；西岡秀爾

(関西学院大学大学院研究員・曹洞宗 凌雲山 崇禅寺副住職) 未定

シンポジスト；高瀬頭功 (法源寺 副住職) 未定

コメンテーター：上田紀行 (東京工業大学副学長)・鎌田東二 (京都大学名誉教授)

6 月 11 日 (日)

研究発表 (口頭発表)

シンポジウム「コミュニティの人柱とならん～開拓する地域包括ケア～」

シンポジスト；上馬場 和夫 (NPO 日本アールヴェーダ協会 理事長)

シンポジスト；谷山 洋三 (東北大学 教授)

シンポジスト；大河内 大博 (浄土宗願生寺 住職)

シンポジスト；石川麗子 (街のイスキア代表理事) 未定

コメンテーター；鎌田東二 (京都大学名誉教授)

【参加費】

正会員・支援会員	対面	6,000 円	オンライン	4,000 円
非会員	対面	7,000 円	オンライン	5,000 円
学生会員	対面	3,000 円	オンライン	2,000 円
学生非会員	対面	3,500 円	オンライン	2,500 円

【宿泊】

- 大栄寺 宿泊費：3,000 円（朝粥付き・大浴場完備・40 名のみ）
 - 北方文化博物館内 大呂菴 宿泊費：11,000 円（朝食付き・女性限定 12 名のみ）
- 他の宿泊は各自で手配をお願いします。

【その他の申し込み】

- 6/10（土）エクスカッション 2 種（500 円・550 円）・懇親会（一般 5000 円・学生 2500 円）・ラートリカサンガ（無料）の企画があります。
 - 6/11（日）座禅体験（無料）、昼食のお弁当を予約できます（お茶付き 1000 円）
- ※詳細は後日発行のニュースレターで確認いただけます。

学会長挨拶

日本仏教看護・ビハーラ学会
会長 今井 洋介

ご挨拶

2020 年 2 月 3 日、横浜港で行われたダイヤモンドプリンセス号の検疫で新型コロナウイルスの集団感染が報告されてからもうすぐ 3 年が経とうとしています。

分断と喪失への恐れによる得体のしれない不安感が社会全体を覆い尽くそうとする中、当学会は、若麻績敏隆前会長のもと、「ありがとうの花束」と命名した、さまざまなかたちでのちへのエールを発信し続けました。リモート開催にて開催した 2021 年の年次大会では中村桂子氏により、悠久の時の流れの中で縁がつむぎだす生命の多様性と愛おしさが謳われました。2022 年度には念願の東北での年次大会が開催され、谷山洋三大会長が、大震災の中で宗教者が体裁も何もかもかなぐり捨ててホームから公共の場に飛び出し利他行を行う、はじまりの地点から現在までの展開を眼前に示してくださいました。

そして、2023 年 6 月 10 日（土）、11 日（日）の両日、第 19 回年次大会が新潟の地で開催されます。この三年間のたまりにたまった熱を一気に大解放せんとする今村達弥大会長による極めて高温度（取り扱い注意）の大会趣意書をこのあとにご紹介します。まずはご一読ください。

身を捨てて他を利する、その言葉通りに生命を燃やし尽くし旅立っていった太田宏仁氏、長純一氏、この二人の同志の活動をパネル展示にてご紹介します。お二人の活躍に思いを馳せるとともに、彼らの思いが受け継がれていく様を二つのシンポジウムで目の当たりにします。

上田紀行氏は基調講演で、鎌田東二氏は法螺貝と歌で大会を盛り上げてくださいます。

夜は、音楽と密教で時間を忘れて語り明かしましょう。

年間を通じて当学会の教育研修委員会が学会員向けにリモート開催してくださっている仏教看護勉強会より、ソーシャルワークと仏教看護の研究と教育に関わりながら、認知症ケアの最前線でご活躍し、タイの寺院では自ら仏教ケアを実践されているホン・グエン氏による「仏教看護」と「ケアラーへのケア」についての講演とワークを終日視聴できるコーナーを設けます。仏教看護とはなにか。学び直し、学び初めに最適の機会と思います。

会場の大栄寺様は、北越の古禅林として数多くの禅僧が修行に励んだ大道場です。長岡西病院ビハーラ病棟開棟の際にもご尽力を頂いた五十嵐紀典住職の特別のご厚意にて、本堂、大広間のみならず、禅道場まで年次大会開催のためにお貸しいただけます。隣接する北方文化博物館は全国屈指の豪農であった伊藤家の邸宅をそのまま流用しており、贅を尽くした日本庭園では神秘的な美しさをたたえる古代蓮が、みなさまをお待ちしています。

どうぞお誘いあわせの上ご参加ください。

（本年度も、対面とリモートのハイブリッドでの開催とさせていただきます。）

大会長挨拶

テーマ『いのちのインクルージョン～対話の力を信じて～』

日本仏教看護・ビハーラ学会第19回年次大会
大会長 今村達弥

今大会は、13年ぶりの新潟県開催です。前回開催では「縁のちから」がテーマでした。今回は対話の力です。コロナ禍とロシアのウクライナ侵略戦争という、いのちが生気を失いかけている今こそ、このマスク社会の閉塞から抜け出すために、弾薬よりも対話という処方が必要です。いのちの選別・分断によるサバイバルはまやかしです。あらゆるいのちがインクルージョンされ、生老病死がイキイキとした過程でありうるような関係性を築いていきたいものです。

僧侶も医療者も対人援助職と言えますが、その「当たり前」の手段である対話（ダイアログ）についてこの際再考してみたいと思います。人に法話や療養を説くときそれがモノログになっていないでしょうか？伝達の技術や技法に走るより、聴くことと話すことを相互に交換し合うシンプルともいえる行為に立ち返ることが、むしろ新たな気づきを援助現場にもたらすかもしれません。対話の対は「ついで」であり関係性の始まり（対になる）をあらわします。それが2人称の関係性、看護・介護現場で言うと2人称ケアであると理想的です。同行二人ともいうように、ケアされる側からすると2人称関係が一つでもあればきっと安心であろうからです。しかし、現場側の論理ではとにかく効率が求められがちです。超極端に言えば、2人称で世界は救えるのか、といった身も蓋もない議論もあるでしょう。ところが実は、その複雑性を謳う社会が案外そう隔たったものではないとする理論（スモールワールド理論）があり、「自分とは全く縁もゆかりもないと思っているような他人であっても、たいてい6人くらい友人を辿っていけば、その人に到達できる」というのです。2人称の数珠つなぎでケアの輪は世界を包み変えるかもしれません。これは一つの夢でしょうか。でもジョン・レノンではありませんが、きっとみんなで夢想すればそれが現実になるのでしょうか。

地域包括ケアシステムのいわゆる共助・互助の活動として各地で僧侶の取り組みが報告されるようになってきました。地域包括ケアの有名な概念図は、ビジーでつかみどころがないため「霞が関マンドラ」と揶揄されることがあるそうですが、その中に仏教的資源は臨床宗教師はおろか一切書き込まれていません。看仏連携からいわゆる「寺子屋」活動までいろんなレベルの実践を今後もどんどん発信していったって、地域から求められる社会資源として認知されていくことが望まれます。

ここで2人の故人となられた当学会員のいのちを偲びたいと思います。東日本大震災被災地の石巻で地域包括ケアシステム構築に命懸けで取り組んだ長純一医師(1966～2022)。当学会設立時から仏教ライターとして関り、東日本大震災被災地支援を経て臨床宗教師となった太田宏人師(1970～2018)。2人のいのちを継承するためには、「あらゆる障害に対応した地域包括（インクルージョン）ケアシステム」を実現させること、そこには当然、仏教的資源が盛り込まれていること、向かうべき方向は示されています。

今大会では、スピリチュアルケアに携わる各団体や、僧侶と医療者の協働を切り拓く「寺子屋」などの実践者ができるだけ一堂に会し、お互いの活動とノウハウを共有し合うべく、2つのシンポジウムを企画いたしました。

一つは、まさに上記の真の地域包括ケアシステムのために活動せんとする第一線の実践家に集まっています。題して『コミュニティの人柱とならん～開拓する地域包括ケア～』（シンポジウム2）。アフガニスタンに散った故中村哲医師が、砂漠の荒地を農地と変えるべく、激流の外来河川に斜めに抗する堰を埋め作ったその活動をイメージしたタイトルです。

もう一つは『社会にアウトリーチする仏教』（シンポジウム1）と題して、「山を下り野に放たれた」仏教者の実践を披露していただきます。誰も行きたがらない所、自分が歓迎されない所に行くのが出家者の真骨頂でしょう。寺を出て、刑務所やドヤ街、病院や被災地、紛争地へ越境する活動が、衆生の囚われや恐怖心、穢れの意識を変えていくのではないのでしょうか。今は葬式仏教と揶揄されるものも始まりはそういった活動の一つだったかもしれません。

基調講演は、文化人類学者で東京工業大学副学長である上田紀行さんをお願いいたしました。上田さんはかつてダライ・ラマ法王との対話を果たされ、「この現代に仏教を活きたものとすべく」

まさに仏教ルネッサンスのために著作と活動をなさってこられました。また、リベラルアーツという学際的な教育にも携わってこられた上田さんですので、次世代の地域づくりにとって僧侶が魅力ある存在となりうるのか刺激的なご提言がいただけるものと期待します。

ダライ・ラマは、空＝縁起の悟りを得た菩薩でありながら慈悲行のために現世に何度も出張なさっておられる方です。「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と喝破した宮沢賢治も、誤解を恐れずに言うならば私にとっては同じ系譜に位置づけられる方です。大会長講演は不肖私が、『地域精神医療のロマンとリアル～宮沢賢治に導かれて～』と題して行わせていただきます。フィンランド発祥の対話実践オープンダイアログについても少し報告させていただきます。

対話をテーマにした今大会では、当学会名物であった夜のサンガ＝「ラートリカサンガ」を復活開催いたします。体力の続く範囲で各自が想いを語り（歌い）合う場を設けました。会場の大栄寺は曹洞宗の修行寺として大人数の宿泊が可能なスペックを擁します。ご住職のご厚意で、座禅部屋で静かにお泊りになりたい方も朝まで飲み語りたい方も幅広いニーズにお応えできます。みなさん、諸々、乞うご期待、奮ってご参加いただきたく存じます。